姶良歴史ボランティア協会広報誌第９号　　発行日　平成 22 年 2 月 14 日(木)

あいらの歴史と物語

発行責任者：姶良歴史ボランティア協会
会　長　橘　木　雅　晴
編　集　者：広報部長　竹之下　洲　一

連絡先：〒899-5421 鹿児島県姶良郡姶良町東餅田 498　姶良町歴史民俗資料館 TEL 0995(65)1553

ガ　イ　ド　練　習　発　表

姶良西ノ宮恵比須神社

西　田　　實

姶良西ノ宮恵比須神社は、帖佐駅前自治公民館敷地内にあり、二瀬戸石で作られた立派な祠です。

姶良西ノ宮恵比須神社

この祠は、以前納屋町の道沿いにありましたが、県道拡張により取り除かれ、一時中央公民館内に置かれたものの、帖佐駅前商店街活性化のため、新たに蛭子命(えびす)を祭る兵庫県西宮神社の大国主大神(大黒)を加え、昭和 54 年ごろに移設されました。

祭神は、「恵比須」と「大黒」の二柱です。

毎年夏休みの７月末の日曜日に、小・中学生らが御輿を担いで回り、お賽銭をいただき、恵比須様と大黒様の絵札の２枚を配付しながら、商売繁盛・家内安全などを祈願しています。

山元自治公民館の電燈建設記念碑

橘　木　雅　晴

電燈建設記念碑

明治 44 年、加治木電気株式会社は安国寺の西側に春日寺発電所を建設し、加治木村は翌年の１月、帖佐村は６月、蒲生村は８月に初めて電灯が点灯しました。

山元集落は山間過疎地のため、大正時代末まで、供給を断られランプ生活を強いられていました。しかし大正 13 年に蒲生村白男に蒲生電気利用組合の前郷川発電所が運転開始し、激しい電力市場獲得競争が始まりました。山元集落は直ちに同組合に加入、柊野集落より配電線を延長してもらい、昭和２年 11 月に待望の電灯が点灯しました。電柱寄付や無償労務提供の苦労もありましたが、記念碑の前に立つと当時の村人たちの歓声が聞こえてくるようです。

元　立　院　窯

中　野　　則　子

修験者小野元立によって寛文３年(1663)今の西餅田壺屋に作られた窯で、創始者の名を取って元立院窯と呼ばれています。この窯は肥前の陶工北村伝右衛門を招いて作らせたもので、肥前式の連房式登り窯と推定されていますが、その窯自体はまだ確認されていません。

元立院窯跡の碑

寛文５年に 12 種類の製品が藩に献上されたとの記録が残っています。また延宝８年(1680)には「さらに手広く他国へも販売に励むように」との焼物奉行からの書状が残っており、このころが元立院の最盛期といわれています。作品は重厚でどんこ釉や蛇かつ釉などオリジナリティ溢れる釉薬に特徴があります。

残念ながら窯は徐々に衰退し、５代目の時に廃業してしまいます。５代目元立は龍門司窯に移り釉薬の技法などもそのまま龍門司窯に伝えられました。

『山田めぐりウォーキング』研修発表 11／7(土)

上名板の口付近で

諏訪山板碑と為朝城跡

坂元　清美

鎮西八郎為朝が築城した山城との伝説があります。水が乏しく山頂は狭かったので玉城山に改めて築城したと伝えられています。

板碑(いたび)は諏訪神社跡(お諏訪様と呼ばれる)の頂上付近、雑木林の中に一基建立されています。丸味を帯びた台座の上に高さ1m幅 25 cm厚さ15 cmの直方体石碑で1328年に全国1万6千本建立の中の一基です。板碑上部は欠けており、二条の溝があり、中央部には金剛界大日如来の種子(しゅじ)である梵字バンが薬研彫(やげんぼ)りされています。

西田野町

竹之下　洲一

藩政時代の我が姶良町の山田郷・帖佐郷には、地頭仮屋が、重富郷には領主仮屋という政庁が置かれ、その周りには郷士、家中士と呼ばれる武士たちが居住する集落(麓)がありました。この麓の周りに村(在)・野町・浦町などと呼ばれる集落があり、それぞれの集落に農民、商人、漁師などが生活していました。

西田野町は山田郷にあり、現在の西田の田の神が鎮座している辺りから南の大山口の辺りまでの地域でした。そこでは、武士や農民たちの日用品(米、麹、ナタネ油、染物、豆腐など)を売る店屋がありました。田の神(1805年)の近くには、八坂神社(1774 年)や貴船神社があり、「田の神講」、「お祇園さぁ」、「豊祭(ほぜ)」などのお祭が、明日への活力ともなっていたようです。

賑やかだった西田野町も、やがて文化年間のころから衰退し、明治にはいると山田橋周辺の寺脇や新町に商店街は移っていきました。

陽春院と廃仏毀釈

竹之内　和仁

玉城山禅福寺陽春院跡は、山田城大手口右側の杉木立の中にあります。今から500年ほど前、鹿児島の曹洞宗玉龍山福昌寺の末寺として創建されました。本尊は釈迦如来像です。

現在は、明治2年の廃仏毀釈によって、破損した仁王像と、数基の坊主墓が草むらの中に残っています。その他、数少ない遺物として畑から掘り出された不動明王像の頭部が山田小学校に保管されています。

なぜこのように寺院が破壊されたのでしょうか。それは、幕末の国学者平田篤胤による復古神道と廃仏思想に影響された明治新政府の神道国教化政策に基づく「神仏分離令」発布によるものです。

県下1616の寺院は破壊され、多くの文化遺産も消失してしまいました。

黒島神社境内

悲運の海軍大将 日高壮之丞

藤崎　幸雄

日高壮之丞(1848～1932)は、父宮内清之進（藩奉行職・儒学者）、母清子(山田郷森家出身)の次男として、鹿児島城下に誕生しました。

正装した日高宗之丞
（宮内政雄氏提供）

戊辰戦争従軍後海軍へ。各々の戦役、海軍要職を経て、明治35年常備艦隊司令長官に就任。

日露関係風雲急を告げ、山本権兵衛海軍大臣の招電を受けた日高は、颯爽と大臣室へ乗り込みました。開戦ともなれば、当然連合艦隊司長官は自分が就くものと思っていましたが、東郷平八郎と更迭されてしまいました。激昂した日高は短剣を抜き「これで俺を刺し殺せ！」と強く抗議したそうです。

日高と朋友以上の関係にあった山本が、東郷と変える事情を説明しました。日高は、山本の国家の大事を憂え思う苦悩を察し、涙を呑み了解したそうです。

山田の凱旋門近くに、故海軍大将日高壮之丞翁記念碑が建っています。

水口ゆきえと中津野用水

吉田　しげ子

江戸時代中期のころ、中津野・中川原一帯は高台にあり水利が悪く、陸稲(おかぼ)しか作れず苦労していたようです。そのころ15才だった少女は役人たちの中に交って、山田川から水路を引く道筋を、深水の女生嶽(にょしょうだけ)から“またのぞき”をして見定めたといいます。村人たちと協力し合って工事を始めましたが、農繁期とも重なってくると「ゆきえ」は一人働き続けたといいます。その姿を見て人々は再び道具を取り難工事に取り組みました。岩盤をくり抜き、トンネルを9か所も掘り、約4㎞にも及ぶ用水路が完成し、田に待望の水を注ぐ事ができたのでした。宝暦2年(1752)と記録されています。しかし、その後、利発な少女だったが故の悲劇が起こります。権力者側の手によって無慈悲にも、山中にて殺されてしまいます。村人にとっては何とも耐え難い悲しい出来事だったことでしょう。

山田川に山下井堰(いせき)を作り、水門から水を通す水路取付口に“ゆきえ”の功績を称え、昭和26年に記念碑が地元民によって建立されています。宝暦3年は、薩摩藩が木曽川治水工事を完成させたという時でもありました。

西田の田の神

佐土原　保子

文化2年、今から206年前建立。高さ71㎝。平成14年町の有形民俗文化財に指定。田の神舞の型で、たすきをかけて袴を着けて、右手にメシゲ、左手に小手をかざしている。太くて大きな鼻、下がった眉とめぐり、口は小さく顔は丸々して福々しい。濃い朱色に染まった顔は神職が少々お酒に酔って田の神舞を舞っているユーモラスな姿です。

旧薩摩藩領内に多く分布する田の神は、約

西田の田の神前

2000体と云われています。一般的な形は甑の底に敷くシキと云うワラのスノコを頭にかぶり、手にメシゲ・お椀・スリコギを持ち、田仕事等の立姿で、顔は笑顔で翁の顔が多いです。

薩摩半島では大日・地蔵など仏像であり、大隅半島では衣冠束帯に笏(しゃく)を持つ神像として始まり、村々をめぐる僧や神舞を舞う神職姿の田の神像となり、さらに田の神舞の像に発展したものと思われます。

このように田の神像（タノカンサー）は、南九州で独自に発展した庶民性豊かな民俗文化財といえます。

姶良町周辺の史跡紹介③

松齢山長年寺跡の「亀墓」

本多　幸子

長年寺跡の亀墓

加治木町木田西ノ原にある長年寺は、帖佐天福寺の末寺でしたが、加治木島津家の兵庫頭(ひょうごのかみ)忠朗(ただあき)公により福昌寺の末寺と改められました。

ここの墓には、「カメンカンサー」と、土地の人々が呼んでいる立派な供養塔があります。土台は亀の姿で顔は龍といわれる「亀墓」です。これは、後に大守重豪公となられた加治木島津家第５代久方を生んで二日目に亡くなられた母島津都美様のために、三十三回忌にあたる安永６年に重豪公が建てたものです。当寺の東方にある能仁寺(加治木島津歴代の領主や正室の墓地)とともに、当地では名高い寺の一つでしたが、現在は墓地のみが残されています。

姶　郷 *(あいきょう)*

黒糖の価格価値について　(藤　崎　幸　雄)

薩摩藩財政改革の柱となった黒糖のことを、ふと思い立ち調べてみた。

現在の黒糖小売価格１斤(600ｇ)＝750円
現在の米価５kg(3升３合)＝2000円
＊黒糖１斤は米１升２合４勺に相当
天保時の黒糖価格１斤＝銀１匁１分７厘５毛
天保時の米価格１升＝銀９分６厘３毛
＊黒糖１斤は米１升２合２勺に相当

170年の時を経て、米価に換算すると黒糖の価格が変わらない(同じ)とは、これ如何に？
謎解きは次号にてお楽しみに。

中庸の生き方について　(竹之内　和　仁)

「中庸の生き方」という本を読んでみた。その中に伊達政宗公の言葉があったので紹介したい。

仁に過ぎれば弱くなる
義に過ぎれば頑(かたく)なとなる
礼に過ぎればへつらいになる
智に過ぎれば嘘をつく
信に過ぎればだまされる

ますます不可解な世の中になりつつあるが、何時でも中庸の心を持って生きたいものだ。

ボランティアガイド実施報告

10月　1日 11:15~12:00	福岡女学院大学生涯学習センター　御一行20名様
案　内　者	恒吉一洋、橘木雅晴
コ　ー　ス	平松城跡・重富麓→白銀坂
10月22日 9:00~12:00	加治木町郷土史同好会 御一行18名様
案　内　者	吉田しげ子、濱口純則、橘木雅晴
コ　ー　ス	義弘居館跡・稲荷神社→宇都窯跡→亀泉院跡
11月11日 10:00~10:40	重富小学校４年生　社会科学習見学　児童76名・引率者４名様
案　内　者	学芸員 深野信之、佐土原保子
コ　ー　ス	歴史民俗資料館内の展示物案内・説明
11月24日 9:30~11:50	重富中学校家庭学級散策担当 御一行９名様
案　内　者	学芸員 下鶴弘、藤崎幸雄
コ　ー　ス	歴民館→白金酒造石蔵→脇元地区散策→白銀坂駐車場

歴史用語解説　(竹之下　洲　一)

『復古神道』　江戸時代の国学の展開の中から大成された神道である。荷田春満・賀茂真淵・本居宣長らによって体系づけられ、平田篤胤によって大成された。それまでの中世以来の神道（伊勢神道・唯一神道）や江戸初期の儒家神道（垂加神道）に対して、日本の古代のありのままの祭祀を伝えていきたいと批判し、古伝記や祝詞研究などをふまえた祭祀を行うべきことを説き、日本文化の優秀性を主張した。

復古神道は、幕末の尊王攘夷運動に大きな影響を与えた。独善的で排他的な一面を持つが、明治維新の思想的側面を形成し、神仏分離・廃仏毀釈の運動を展開し、神道国教化を推進していった。幕末・明治期の神道の主流となった。

編集後記

第９号は、初めて山田地区の史跡めぐりを企画・実践した特集です。案内（私たちには研修）した史跡すべてを掲載できないのが残念です。(連載予定の「歴史民俗資料館所蔵品」の紹介も割愛しました。)

史跡めぐり終了後の参加者の笑顔がすばらしく、企画・実践した甲斐がありました。

３月には、加治木町、蒲生町と合併します。両町の史跡も案内できるよう研修して、その内容を現在よりも多く広報します。

第10号は、「歴史の道・白銀坂」など重富地区の史跡の内容が中心となります。